

おてら

常例十六日講
写経会
一月、二月、八月
はお休み致します



本願寺

第一の矢、第二の矢

住職 蒲原 霊英

ある時お釈迦様が病気になられ、「悟りを開かれたお釈迦様でも病気になるのですね」と意地悪く言う人がいました。するとお釈迦様は、「第一の矢は受けますが、第二の矢は受けません」とお答えになられました。「第一の矢は受ける」とは、悟りを開いた者でも、生身の身体がある限り老いや病からは決して逃れられないことを指します。「第二の矢は受けない」とは、老いや病、そして死が襲っても、それによって苦悩させられることはないということです。

まずまず私達は、「第一の矢を受けた」という事実そのものすら認めたくない、認めようとしないことが多いのではないのでしょうか。自分に不都合なことは見たくないのです。そして往々にして、「第一の矢を受けた」ということすら認められないまま、「どうして私ばかり」「あの時こうしておけば良かったんじゃないか」、「この先どうなるのだろう」という、後悔、怒り、自責の念、不安等々、次から次へと色々な思いを巡らせては、勝手に苦しんでしまうのではないのでしょうか。それが「第二の矢」です。ということとは、思い悩まなければ「第二の矢」を受けずに済むことになります。とは言え、色々と思ひ悩むなど言ってみても、これもなかなか難しい話です。思い悩まないようにしようと思うことと自分が今度はストレスとなつて、また苦しまなければならぬものです。そんなもんです。そう、私達は「そんなもん」なんです。ところが、人間愚かなもので、自分が「そんなもん」だと認めることすら嫌なものです。ちっぽけなプライドが邪魔をするのでしょうか。馬鹿です。

親鸞聖人は、「そんなもん」の愚かしい私だからこそ、阿弥陀如来が「必ず救う、我にまかせよ」と救いのおめあてとしてくださったのだと説かれました。阿弥陀様は、既に矢を受けているにもかかわらず、射なくてもよい矢をどんどん自分で勝手に射って、それがズバスバ自分に当たって苦しんでいるような愚かな私に、まずは「お前はこんな愚かなことをしているんだぞ。己の姿を見みなさい」と声を掛けてくださっています。そして、「そんな要らん矢なんて射なくても良いんだぞ。大丈夫全て私にまかせなさい」と。なので、私達はどんなことがこの身に起きようと、つまりどんな「第一の矢」が飛んで来ても、そのまま受け止める、あるがままいただくだけで良いのです。その上で、例えば治る病気なら治してもらえば良いので、何かできることがあるのならやれば良いですが、それもこれも引く括めて、全て阿弥陀様の「おはからい」だと思っておまかせしてしまえば良いのです。どうでしょう、心が楽になりませんか？後は、「南無阿弥陀仏」の感謝のお念仏を称えさせていただきますでしょう。

合掌



本願寺の 名宝 1



教行信証(6冊)【重文】

浄土真宗の教義を体系的に論述された立教開宗の根本聖典。正式には『顕浄土真実教行証文類』と言ひ、教・行・信・証・真・土・化身土文類の6巻から成ります。親鸞聖人は52歳頃から執筆にかかり、晩年に至るまで加筆訂正されました。西本願寺本『教行信証』は、聖人の真筆である「坂東本」(草稿本)に対して、清書本と称されます。

親鸞聖人影像 鏡御影【国宝】

親鸞聖人の崇高な風格を墨線のみで見事に写し出した鏡御影は、鎌倉時代の似絵の最高傑作の一つとして著名です。細線で丁寧描かれた顔と、身体のデッサン風の筆遣いの妙が御影に緊張感を与えています。筆者は、似絵の大成者・藤原信実の子専阿弥陀仏。

『教行信証』が生まれるまで 6

親鸞聖人のご生涯をまとめた『御伝鈔』によると、聖人が九歳の治承五年(一一八二)の春、「前大僧正の貴坊」において出家得度が行われたとされています。またこの「前大僧正」については、「慈円慈鎮和尚」と注記されています。「大僧正」とは、朝廷から任命された僧侶の官職である僧官のトップです。

聖人の出家を執り行つた慈円(一一五五〜一二二五)とは、平安時代末期から鎌倉時代にかけての人物で、聖人より十八歳年上になります。慈円は、政治の中心的立場にある摂政や関白を務めた藤原忠通の四男で、兄には近衛家を興した基実や九条家を興した兼実がいました。慈円は、当時としては政治的に有力な家に生まれたため、天台僧になつてからも出世が進み、天台宗の最高の地位である天台座主に四度も就任しています。また僧侶でありながら、歌人としても著名な人物でした。

慈円は、十歳で父を亡くしたため、十三歳で比叡山の青蓮院第二代覚快法親王(父は鳥羽天皇で、出家後に親王宣下を受けた)に付いて出家しました。このため最初は、師の覚快から「道快」という法名を付けてもらいましたが、ちやうど親鸞聖人が出家された養和元年(一一八一、七月に治承五年から改元)十一月に、道快という名を改めて「慈円」と称しました。この養和元年十一月というのは、覚快が亡くなり、慈円が青蓮院を受け継いで法印(僧侶の位階である僧位の最高位)に叙せられた時なので、このことが改名の理由と思われる。

なお、慈円が「大僧正」に任じられるのは、聖人が比叡山を下りられた翌々年である建仁三年(一一〇三)のことなので、『御伝鈔』では、慈円が聖人の出家を執り行つた時ではなく、これがまとめられた時代から見た慈円の僧侶としての地位を記してあることになります。

また、「慈鎮」という号は、嘉禄元年(一二二五)に七十一歳で没した慈円に対して、十二年後の十三回忌に当たる嘉禎三年(一二三三)に四条天皇から送られた諡です。これは、生前の業績を讃えて敬意を表すために贈るといふ意図があります。(本願寺新報より一部修正転載)